

# 彙報

## ◇令和元年度卒業論文

### 文学部 日本語日本文学コース 日本語日本文学専攻

- |   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』論<br>——「母—娘関係」からみる桃子さん<br>太宰治『桜桃』論<br>——桜桃の表象するもの——<br>田山花袋『蒲団』論<br>——ツルゲーネフから見る『蒲団』——<br>村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論<br>——物語における〈電話〉の役割——<br>「もたらす」の類義語研究<br>奥泉光『その言葉を』<br>——「失語症」飛楽の回帰——<br>「生活」の類義語研究<br>複合動詞「く倒す」の研究<br>「くマニア」の類義語研究<br>『長谷雄草紙』の研究<br>——紀長谷雄の虚実をめぐって——<br>『落窪物語』——女君とはいかなる存在か—— | 東條健一朗<br>長沢智子<br>武内健太<br>大石樹歩<br>佐野佑樹<br>鋤柄 佐保里<br>堀内 弥花<br>奥岡 姫奈子<br>大畑 悠<br>中村 日向子<br>岩田 鮎美 | 『男色大鑑』における「死」の表現についての考察<br>大江健三郎『個人的な体験』論<br>——〈黒〉から〈白〉へ——<br>「く女子」の研究<br>複合動詞の意味の研究<br>村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論<br>——「父親」の存在をめぐって——<br>「ダサイ」についての研究<br>——「キモい」「ウザい」と比較して——<br>吉本ばなな『キッチン』論<br>——家族の私たちから見えるもの——<br>「くすぎる」の研究<br>『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論<br>——村上春樹と名古屋——<br>伊藤左千夫『野菊の墓』論<br>——政夫の語りを中心に——<br>『雨月物語』の研究<br>——磯良の問題を中心に——<br>断り表現の研究<br>「強い」「高い」「大きい」「多い」の比較研究<br>町田康『くっすん大黒』論<br>——「自分小説」と饒舌体—— | 小島佳苗<br>各務満喜<br>近藤 葵<br>嶋 良祐<br>加藤 るみ<br>山崎 晃平<br>中村 拡子<br>山田 和佳乃<br>田 中天舞<br>杉本 明日花<br>伊藤 希<br>渡邊 織江<br>高木 翔太<br>三好 聡 |
|---|---|---|--|

「応答詞化」の研究

浜田 明

『とりかへばや物語』の研究

北原 梨紗

—官職の呼称を中心に—

「世代」という語の意味用法について

山中 隼

伝達を表す「走る」の意味用法について

大岩 悠華

『今昔物語集』における「兵」についての考察

小林 珠緒

『一寸法師』の研究

—一寸法師像の変遷を辿る—

鈴木 康平

「く思想」の類義語研究

渡邊 勇帆

江戸川乱歩『盲獣』論

—登場人物に注目して—

沢本 佳宏

接尾辞「化」についての研究

吉岡 英里奈

日本語の揺れに関する研究

辻 大輝

接尾辞「く力」の研究

富田 悠介

強調を表わす漢語語構成要素の研究

伊藤 太一

「〇活」についての研究

永谷 彰啓

『平中物語』の研究

平田 恵美里

泉鏡花「陽炎座」論

—「春昼」「春昼後刻」との比較、

岡庭 史弥

—特に入れ子構造と作中芝居を中心に—

若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』論

村上 奈帆

—八角山から考える桃子さんの人生—

「問題」の接尾辞的用法について

山崎 理紗子

阿仏尼の研究

—『うたたね』『阿仏の文』『十六夜日記』を通じて—

「流れる」の類義表現の研究

岡田 唯里

—抽象物を対象に—

武者小路実篤『友情』論

飯見 春佳

—「女」としての杉子—

『松浦宮物語』の研究

大井 彩奈

—「前生」という空白をめぐる物語として—

依頼表現の研究

小玉 菜月

村田沙耶香『コンビニ人間』論

島 愛理花

—動物化する恵子—

『源氏物語』における「掻く」と「弾く」

内田 翔也

—音楽表現に着目して—

『源氏物語』における「いとほし」

門田 萌

怒りの感情を表す表現についての研究

神谷 敬太

村上春樹『アフターダーク』論

堀江 萌

—「私たち」のいる世界—

「知る」と「分かる」の研究

加藤 史也

『源氏物語』における「いとほし」

田中 さくら

—「心苦し」との比較を通じて—

## 『愛知大學 國文學』論文投稿規定

- ① 投稿は愛知大学国文学会員(学生会員を含む)に限ります。
  - ② 内容は、日本文学、日本語学、日本語表現学、国語教育等に関する未発表のものに限ります。投稿原稿の種類は、論文・資料紹介・研究ノート等です。
  - ③ 投稿原稿の分量は、本文・注を含めて四〇〇字×四〇枚を基準とします。それを超える場合は分割掲載や枚数の削減をお願いする場合があります。
  - ④ 投稿はオリジナル原稿一部(手書き原稿は不可とします)とコピー二部を左記の住所までご提出ください。また、採否をお知らせする必要上、メールアドレス等、連絡先を添えてください。
- 【原稿の送付先】  
〒四四一・八五二二  
愛知県豊橋市町畑町一・一 愛知大学研究館  
愛知大学国文学会『愛知大學 國文學』編集委員会
- ⑤ 投稿原稿の採否・掲載順序については編集委員会にお任せください。
  - ⑥ 投稿原稿が採用になった場合には、電子データをご提出

いただきます。

- ⑦ 採用された論文は、『愛知大學 國文學』に紙媒体で掲載されると同時に、愛知大学図書館の機関リポジトリを通じて公開(オープンアクセス)されます。投稿の時点でご了承ください。

『愛知大學 國文學』第六一号原稿募集

- ・発行予定 二〇二二年一月
- ・原稿締切日 二〇二二年八月三十一日

◇令和年二度 愛知大学国文学会諸行事

(1)令和二年度 愛知大学国文学会 中止

【会計監査】安智史、松村美奈  
【幹事】和田明美

(2)令和二年度 岡崎日本文化講座 中止

※「中止」は、すべて新型コロナウイルスの感染拡大防止のための措置です。

役員については、総会が開催されないため、概ね令和元年度を継続し、慣例に従って学生役員と幹事・会計のみ交替した。

【会長】 和田明美

【副会長】 漆谷広樹、高山善樹、山内重雄、谷彰

【書記】 舟橋陸斗（和田ゼミ4年生）

【編集】 渡邊章夫

【会計】 和田明美

## 〔後記〕

二〇一九年一月武漢発の新型コロナウイルスは、世界を感染症の脅威に晒し、二〇二〇年一二月の死者は一七〇万人を超えました。日本でも、二〇二〇年二月のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」感染者受入れにはじまり、四月～五月にかけての緊急事態宣言期間を経て、目下第三波の感染拡大に見舞われています。八月の第二波収束も束の間、落葉舞う一一月末より急激に感染は拡大し、一二月二四日クリスマスイブの感染者は二〇万人を超え、死者も三千人を上回りました。

今年度の愛知大学キャンパスも一変しました。桜や躑躅・藤の花咲く春のキャンパスに学生の姿はなく、図書館まで閉館となりました。我々は、新学期早々オンライン授業という新たな講義方法の習得に努め、ライブ型やオンデマンド型等のトラブルを克服しながら、オンライン授業を続けました。秋学期には、受講生五〇人以下の講義や演習科目で対面式授業を再開したものの、オンライン授業を併用したハイブリッド式授業を行うことになりました。毎年開催していた愛知大学国文学会や岡崎日

本文化講座も、中止を余儀なくされました。このようななか、論文三本を所収した『愛知大学国文学』六〇号が刊行の運びとなりました。コロナ禍における還暦号刊行を称え、慶びを分かちあいたいと思います。

二〇二一年四月、愛知大学文学部に「日本語日本文学科」が新設されます。既存の「日本語学」「日本文学」に「日本語表現学」の領域を加えての新たな出発です。全国的に文学部が混迷・低迷する時代にあつて、本学文学部の「歴史地理学科」「日本語日本文学」二学科同時新設の改革は、国際化時代の日本の歴史文化・言語文化研究への期待とともに、社会的にも注視されています。ウイズコロナ・ポストコロナ時代における多文化共生・多言語共生時代を見据えた「日本語日本文学科」の新たな挑戦がはじまろうとしています。愛知大学国文学会も、社会言語学や日本語教育の分野に秀でた平高史也先生（慶応義塾大学名誉教授）をお迎えして新たなスタートラインに立ちます。

二〇二〇年師走 和田明美記